
「もったいねエ」

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「もったいねエ」

【Nコード】

N3059F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

インチキ・チンインチキ・チンシャラット、インチキインチキ・チンガム公、グミ助、チヨコ坊の3人が繰り広げるコメディイ小説。

「もったいねエ」

インチキ・チン

インチキ・チン

シャラット、インチキ

インチキ・チン

どうも、このオ、世の中には、無いように有るのが、嘘。有るようで無いのがお金、ということになってます。嘘か本とかわからないようなこともよくあります。

夏になって、日本中どこへ行っても蒸し暑い。

長屋住まいのグミ助、東京生まれで、田舎がない。クーラーもない。そんな事をチヨコ坊に愚痴りますと、チヨコ坊の二つ返事で、長野県の田舎に二人で行く事になりました。

昔ツから、軽井沢とか清里なんて所は有名ですが、二人が行ったのは、大深山。夏は高原野菜の収穫期。平地も山肌も、もう見渡す限りレタスの畑。

一〇センチくらいに育った苗を畑に植え付けますと、黒かった畑が日ごとに、緑に染まっていくのを見ていますと、ああ見事なもんです。チヨコ坊とグミ助が大深山に着いたのは、畑仕事が一段落ついた午後。手作りお八ギでお茶時間。

「よう、知ってるけ、隣村の権兵衛さん」とチヨコ坊の親父さんが身を乗り出した。

「ああ知ってる、大分貯めて、久作ンとこの畑買ったってこつたな、たいしたもんだ」と手伝いの善助が手放しで感心する。

「その貯め方だ、たいしたもんだも、あすこまで行くと、呆れるな」と親父がいまいますように言っつて、グツとお茶を飲む。

善助が沢庵をガリツと噛んで、呆れるって、何が、と聞く。

「そうじゃねエか、せつかく沸かした湯だからって、風呂に入って首も出さねエってよ。屁こくにもな、畑の風上でやって、肥やしにするって言いやがる」

聞いてた善助が、風のない日にや、どうすんだ、なんて茶化す。

「そんな時や、おめエ、畑の中でやるって話した」

「親父、そりや、野糞だ」と善助がまた茶化す。二人の話に乗ってチヨコ坊が一言

「貧乏人のヒガミって、ヤアね」なんて言ったもんですから親父が「おいチヨコ、誰の事言つてんだ」と怒った。

「目くじら立てる事、ないじゃない」シヤラつとチヨコ坊。

「おりやな、そうまでして、金金つて言うのが嫌なんだ」

「何カツコウ付けてんの、おあたいが離婚する時、金うんとふんだくれ、なんて言つたの、どこの誰よ」なんて言つたもんだから、親父が湯飲みを投げるように置くと

「あ、眠い、昼寝だ」いなりさっさと立ってどっかへ行ってしまった。

入れ替わって祖母さんが現れ、チヨコ坊に耳打ちをする。聞いたチヨコ坊、祖母さんの顔をしみじみ眺め、じゃ、帰れって言う事かと、囁いた。

こつくりうなずく祖母さん。そんなこんなで、三十分もしない内に親子でヘソを曲げ、チヨコ坊はグミ助を顎でシャクツてさっさと歩き出した。

「グミ、何オタオタ振り向きながら歩いてんの」

「あ、あの、おハギ・・・」ああ、もったいねエ。

朝、東京を発つて夕方には又戻ってきたんですから、楽しいはずもなく、帰り道、チヨコ坊はプリプリ怒りっぱなし、グミ助はおハギに未練たつぷり、ああ、もったいねエ。

「ねエ、ガムちゃん、帰ってくる頃じゃないかい」

「夏って言つてたが、何日とは言つてなかつたな、どうすんだい、

これから今日」

「帰るわよ、家に」

「ん、俺、乾きが良いから、障子張りでもやるか」
チヨコ坊と別れ、グミ助もボロ長屋に帰ってきて、なんだかよく分からん日だったとか何とか、ブツブツ言いながら、障子張りを始めます。

流れ板、職場なければ、只の馬鹿。

着流し流れ板のガム公、ヨーロッパを切り上げ、日本に帰って来たのが宵の口。

「よう、グミ助、元気かい」

「今、手え離せねえ、後にしてくれ」

破れ長屋の自宅で、障子の張替えをしていたグミ助の背で、いきなり声が出たんですが、まさかにガム公だとは気が着かない。

あのオ障子の張り方ってものは、なかなか難しい。

「グミ助、障子つてなア下から張るもんだ」

「どっから張ったって・・・」と言って、しよいとグミ助が振り向きませす。

「あ、あ、ああ兄ィー」

戸が菱形になつて開いてる玄関に立つてガム公が

「何ポカンとしてる、チャーんと、足あるだろ」

「ん、お化けじゃないな、何時来たンだい」なんて、グミ助も悪乗りで言います。

「障子つてなア、上から張ると、継ぎ目が上向く、そこに埃が溜ンだよ」

「ああ、成る程な、何時来たンだい」

「おメーの前に、今だ」なんて、ガム公がおどけます。

「日本にさ」とムキンなつて聞くグミ助。

「さつきだ」言いながらガム公が入って、十年か早エーな、と懐かしそうに見渡す。

「ああ、兄ィがエグレスへ行つて、もうそんなになんだ」と溜息混

じりのグミ助。

そのグミ助を心配そうにガム公が

「今、何やってる」

「旅行から帰ってから、考えてよ。兄イの真似事やってる」

「何イ、板前か」

「プーたるやつてると飯を追っかけるのが関の山、これやってると飯が追っかけてくる」とグミ助がしんみりと言つと

「ちげえねえ、すると、もう五年かい、どんな素人でも、真面目にやってりや、プロだ」とどっかクスツとしながらのガム公。

「でもよオ、やればやるほど、料理つてな、オツかネエな」なんてグミ助が言つと、それが分かれば、いい華板に成れるぞとガム公が励ます。

「なあ、兄イ、チヨコ坊は知ってんのかい、来たつて事」

「まだだ」

「なあんだ、水くせえな」

「バカ、成田に降り立って、さて、どっちに行こうかってチラシの紙飛行機飛ばして、先のむいた方につて来たら、ここだった。三畳一間でもいいから、落ち着き先が決まるまで、と思つてよ。又世話かけるが、いいかい」

「ちよつと待つてくれ、俺、チヨコ坊に電話してくる」

一人残つたガム公、障子の張替え中とはいえ、どっかから、ペンキの匂いも包みます。

見れば玩具のような家具の剥げた所に、塗つた後がある。部屋の隅に積んである本を見ると「魯山人」だ、「料理の起源」だなんて、結構勉強してるグミ助が見え、ジーンと嬉しくなつてきます。

ガタ、ピシと戸の開く音がして、グミ助が戻ってきました。

「どこまで行つてた」

「大家の電話と思つたが、ちよいと具合悪リイんで、通りまで、じき来るよ、チヨコ坊」

「どうしてるチヨコ坊」となんとなく照れくさそうに聞くガム公。

「知ってんだろ、クリーニング屋の若旦那、散々口説いておいて、跡継ぎが、四・五年経ってもその兆しがねエもんだから、出て行けた。ったく」

「ああ、あいつか、女を子作りの道具と思ってやがったか」ガタツと表で音がしたと思うと、張りかけの障子を蹴飛ばしてチヨコ坊が入ってきた。

ペタンと尻餅正座で、ガム公の前に滑り込む。表で大家の声もする。

「おい、グミ助居るか」

「あ、大家さん、どうぞ」

「どうぞじゃね、さつき表で見かけたが、さつさとどっかに行きやがって、家賃どうした」

言われて、そそくさと立って表に出るグミ助。

「給料日、あさってなんだ、すぐ払うから待ってくれよ」

「なんだ、昨日じゃないのか、又仕事、変わったな」

「そ、そうなんだ」

事情が分かれば、大家も人の子、無理を言わずに帰った。

「グミ助、なんだ今の話」とガム公が刺す。ガム公に聞かれ、しかじかと話すグミ助。

「よく気が付いたなグミ助、正しいよ、お前エが」この話し、聞いてたチヨコ坊

「何よそれ、油汚れに洗剤使うのが普通で、汚れ落とすのに油を使うって、どういう事よ」グツとグミ助が身を乗り出して言う。

「ホラ、よくさ、空き瓶がもったいねエって洗って使うだろ、水に漬けて取れるラベルはいいがな、糊が取れねエやつがある。この糊に食油を付け、糊を溶かしてから洗剤使うと綺麗に糊が取れるんだ」
「それがどうして店を辞める事になるわけよ」とよく分からないチヨコ坊。

「汚れ落とすのに、油使うのが理屈に合わねエって言う奴が居て、店がそいつの肩を持った」悔し涙に口一文字のグミ助。

「何よ、それで馬鹿だのアホだのって店辞めたの」グミ助の両肩に

手を置くチヨコ坊。

「どんな奴だ」と聞くガム公。

こんな背丈で、こんな顔、グミ助が言ってる最中に

「そいつア下町だ。ポン中アル中、素面の時は借りてきた猫だが、酒飲むと途端に大トラだ、死ぬの殺すのってあたり構わず暴れまくる。今頃店じゃ後悔してるよ。放っておけ」ガム公、手にしたコッブ酒をそつと置き

「いいじゃねエか、手めエの物差しでしか計れねエ奴なんか、墓穴の花道まっしぐらだ、見てれば分かる」

「知ってるの、その下町って人」と小首をかしげるチヨコ坊。

「ああ、忘れんのが、もったいねエぐれエ知ってるさ」言って苦みばしった流れ板ガム公。

アラ・ドッコイ。さてと一服。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059f/>

「もったいねエ」

2010年10月28日08時42分発行